

英語教員養成課程におけるプロジェクト学習の実践¹⁾

大場 浩正^{*2)}

(令和2年2月12日受付；令和2年4月6日受理)

要 旨

本稿の目的は、教員養成系大学に学ぶ学生（学部生と大学院生）を、「プロジェクト学習（project-based learning: PBL）」を通して主体的、自律的で協同的な学習者に育てることである。具体的には、教科（英語科）の指導法に関する科目である「中等英語科指導法（授業論）」において、「中学生が心を動かされ、英語に興味を持つ」という課題のもと、チームで教材（素材）の作成とそのプレゼンテーションを行い、最後に評価（他者評価および自作のルーブリックによる自己評価）を行った。これらの活動を通して、将来の教員としての資質・能力の育成（キャリア教育）を目指した。学生は、チームで、中学校における英語教育の課題や中学生の興味・関心を探り、ICTを駆使した教材（素材）を作成した。英語や英語教育に対する探究のプロセスにおいて、学生がどのように変化していったかを、学生たちの毎回のリフレクションや学習動機履歴およびアンケートによって検証していく。

KEY WORDS

Teacher Training Course 教員養成課程, Project-based Learning (PBL) プロジェクト学習,
English Education 英語教育, Rubric ルーブリック

1 はじめに

現在、社会は急速にAI化およびグローバル化しており、必要な情報もインターネットなどを通して容易に手に入るようになってきた。Society 5.0と言われる情報化社会において、能力観や学習観もまた転換が迫られており、学んだ知識を主体的、自律的そして協同的につなげて新しいものに展開していく能力が必要となってきた。すなわち、21世紀に必要な新しい資質・能力や主体的・協同的な課題探究学習へのシフトが必須となった。具体的には2つの力が、実際の社会で求められている。学士課程答申による学士力（表1参照）と経済産業省による社会人基礎力（表2参照）である。このような新しい教育の方向性において、学習者の主体的で自律的な学習活動を促す、アクティブラーニングとしての「プロジェクト学習（project-based learning: PBL）」が注目されてきた。

一方、英語教育に関しては、2020年度から小学校において、3・4年生の外国語活動（英語活動）が必須（年間35時間）になり、5・6年生の外国語（英語）が教科（年間70時間）になった。従って、これまで以上に、中学校においては小学校との連携を意識した指導を行う必要がある。また、小学校においては音声中心で行ってきた学習を、中学校において、いかに発展させていくかなど課題も多い。

本学は教員養成系の単科大学であるため、入学生のほとんどが卒業後、小学校や中学校（あるいは高等学校）の教壇に立つ。学生達は、本学の多くのアクティブラーニング型授業によって、自らの課題の発見に取り組み、多様性を尊重し、他者と協同的な学びを構築する多くの機会を持つことができる。しかしながら、筆者が思うに課題は2つある。1つは、そのようなアクティブラーニング型の授業に慣れていないため、学びをうまく進められない学生がいることである。多くの学生が高校時代にそのような授業をあまり経験していないためではないだろうか。2つ目は、卒業後、実際の学校教育現場において、児童・生徒がアクティブに学びを追究できるような授業を設計し、実践できる能力を身につけることである。解決策の一つは、カリキュラムに先に述べたPBLを導入することである。全ての学生が、主体的・自律的に課題発見、目標設定、学習計画の作成・調整、教材作成、合意形成、成果発表（模擬授業等）、自己評価などの学習活動を行う機会を持つことが重要である。PBLを通して、「21世紀の教育をリードする教員」および「教育職場にイノベーションをもたらす教員」になってもらいたいと思う。

表1 学士力の定義（一部抜粋，学士課程答申より）

1. 知識・理解
専攻する特定の学問分野における基礎的な知識を体系的に理解するとともに，その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。
(1) 多文化・異文化に関する知識の理解
(2) 人類の文化，社会と自然に関する知識の理解
2. 汎用的技術
知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な能力
(1) コミュニケーション・スキル：日本語と特定の外国語を用いて，読み，書き，聞き，話すことができる。
(2) 数量的スキル：自然や社会的事象について，シンボルを活用して分析し，理解し，表現することができる。
(3) 情報リテラシー：ICTを用いて，多様な情報を収集・分析して適正に判断し，モラルに則って効果的に活用することができる。
(4) 論理的思考力：情報や知識を複眼的，論理的に分析し，表現できる。
(5) 問題解決力：問題を発見し，解決に必要な情報を収集・分析・整理し，その問題を確実に解決できる。
3. 態度・志向性
(1) 自己管理力：自らを律して行動できる。
(2) チームワーク，リーダーシップ：他者と協調・協働して行動できる。また，他者に方向性を示し，目標の実現のために動員できる。
(3) 倫理観：自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。
(4) 市民としての社会的責任：社会の一員としての意識を持ち，義務と権利を適正に行使しつつ，社会の発展のために積極的に関与できる。
(5) 生涯学習力：卒業後も自律・自立して学習できる。
4. 総合的な学習経験と創造的思考力
これまでに獲得した知識・技能・態度を総合的に活用し，自らが立てた新たな課題にそれらを適用することができる。

表2 社会人基礎力の定義（一部抜粋，経済産業省より）

1. 前に踏み出す力
一歩前へ踏み出し，失敗しても粘り強く取り組む力（主体性，働きかけ力，実行力）
2. 考え抜く力
疑問を持ち，考え抜く力（課題発見力，計画性，創造力）
3. チームで働く力
多様な人々とともに，目標に向けて協力する力（発信力，傾聴力，柔軟性，状況把握力，規律性，ストレスコントロール力）

本稿において報告する実践では，中学校において英語を指導する際の課題を自ら設定し，その課題をもとに授業設計（教材作成）を行い，最終的にプレゼンテーション（模擬授業）でその成果を発表した。これらのプロセスをグループ（チーム）で行った。従って，これらの活動の目標（ゴール）は各チームで決めることになり，教員はファシリテーター（アドバイザー）として，各チームの活動を支援する役に徹した。つまり，課題の発見，目標設定，学習計画の作成・調整，教材作成，合意形成，成果発表（模擬授業），自己評価等の学習活動を学生自身で自律的に主導し，プロジェクトの企画・運営を行った。なぜなら，これらの活動を通して，上記の学士力と社会人基礎力を身につけてもらいたいからである。現在の子どもたちが大人になった時（2030年や2040年），これらの能力の習得は当たり前となっているのではないだろうか。従って，そのような子どもたちを育てる教員自らが学士力と社会人基礎力を持ち合わせていることは，教員になる上で重要になるであろう。

本稿の目的は，教員養成系大学に学ぶ学生（学部生と大学院生）たちが，どのようにPBLに取り組んだかを，主体的で自律的な学習の観点から報告することである。具体的には，教科の指導法に関する科目（中学校・高等学校）である「中等英語科指導法（授業論）」において，中学生が心を動かされ英語に興味を持つような教材（素材）をチームで作成・プレゼンテーション・評価を行うことを通して，将来の教員としての資質・能力の育成を目指した実践を報告する。

2 PBLにおける理論的背景

2. 1 PBLとは

本授業では，近未来型の学習形態と注目され，欧米では一般的なスタイルとなりつつあるプロジェクト学習（PBL）に基づく授業を展開した。PBLは「中心になる考え方やテーマを核にした学習であり，実社会に根ざした問題群を解決するために，学生が複数人でチームを構成し，共同で探求する取組み」（美馬，2018：12）を目指した一

連の学びの活動をと言え。Thomas (2000) は、PBLの定義は多岐にわたり、普遍的に受け入れられているモデルも理論も不足していると述べている (p.2)。しかしながら、Thomas (2000) は、PBLを次のように定義している (p.1)。

プロジェクト学習とは複雑な課題や挑戦に値する問題に対して、学生がデザイン・問題解決・意思決定・情報検索を一定期間自律的に行い、リアルな制作物もしくはプレゼンテーションを目標としたプロジェクトに従事することによって学ぶ学習形態である。

2. 1. 1 PBLの分類

PBLの分類には大きく2種類ある (松田・佐伯・木村, 2019)。一つは「立案型と実行型」であり、他方は「バーチャル型とリアル型」である。前者は、PBLのゴールとなる最終的なアウトプットが、課題解決の方策や企画を考えることに限定されるのか、あるいは、実際に実行や制作するのかによって分類される (松田・佐伯・木村, 2019: 22)。後者は、最終的なアウトプットが、社会の経済活動や政策、生活等に直接関わるのか、あるいは影響を与えるかによって分類される。直接関わらないものは「バーチャル型」であり、直接関わるものは「リアル型」である (松田・佐伯・木村, 2019: 23)。結果的に影響を与えたか否かではなく、プロジェクトがどちらの意図をもって遂行されているかによって分類する。

さらに、松田・佐伯・木村 (2019, p.24) は、これら2種類の型を組み合わせ、PBLの例を図1のように示している。Aはバーチャル立案型であり、仮想企業の経営課題の解決策を考えるなどが該当する。Bはリアル立案型であり、企業と連携して、実際に販売を目指す新商品の企画案を考えるなどが該当する。Cはバーチャル実行型であり、仮定の課題に基づいて、科学的、工学的な実験を行うことや教職課程で模擬授業を行うなどが考えられる。さらに、

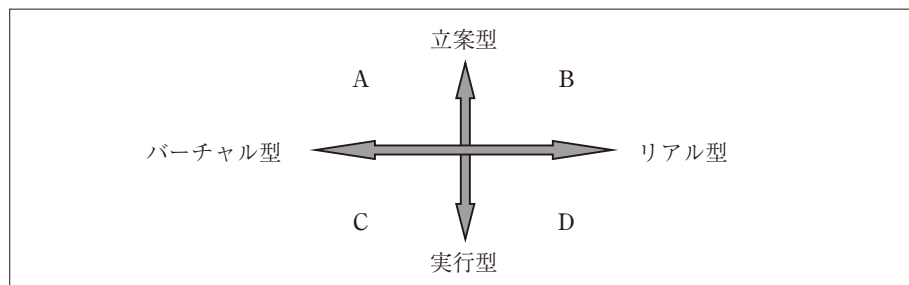


図1 PBLにおける「立案型と実行型」と「バーチャル型とリアル型」の組み合わせ (松田・佐伯・木村, 2019: 24を一部改変)

Dはリアル実行型であり、企業と連携して、実際に製造・販売可能な新商品を製品化する等である。

本実践では、教職課程で学ぶ大学生と大学院生が、実際の教育現場の課題に基づいて教材を作成し、模擬授業 (活動) を行うため、C (バーチャル実行型) に近いPBLと言え。

2. 1. 2 Kim (2001)

Kim (2001) は右図のように、「組織 (グループ) が成功するためのコア理論」を提案している。この理論によると、「結果の質 (Quality of Results)」を高めるためには、まず、「関係の質 (Quality of Relationships)」を高めることが大切である。関係の質が高まると相互理解を深め、お互いを尊重するようになり、共に課題に対して考え、「思考の質 (Quality of Thinking)」が高まる。思考の質が向上すると、自発的に行動し始め「行動の質 (Quality of Actions)」が高まる。最終的には大きな成果が得られ、さらに信頼が深まり関係の質が向上していく。このように、大きな成果を上げるためには、チーム内の関係の質を高めることが必要不可欠である。

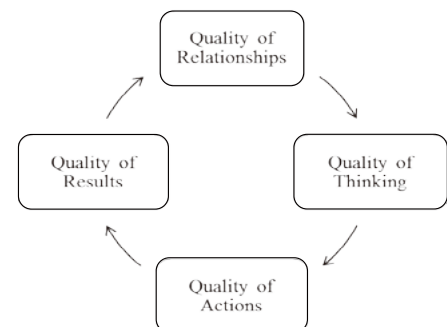


図2 Kim (2001) の成功の循環モデル

2. 1. 3 Tuckman (1965) とTuckman and Jensen (1977)

グループがどのような状態であるかを見極めることも大切である。Tuckman (1965) とTuckman and Jensen (1977) は、「チームビルディング (チームの進化)」としての以下の5段階を提案している。グループが現在どの段

階にいるのかを意識することが大切である。

- (1) 形成期 (Forming) : チームが結成されたばかりで、メンバーはお互いのことはよく分かっていない。従って、チームの目標なども定まっていない状態である。
- (2) 混乱期 (Storming) : チームの目的などに対して意見の食い違いがある。また、人間関係、各自の役割と責任等について意見があり、対立が生まれる。
- (3) 規範期 (Norming) : チームの目的や進め方等、行動規範が確立し、チームの各メンバーの役割が統一され、チームの関係性が安定する。
- (4) 達成期 (Performing) : チームに結束力や一体感が生まれ、チームの力が目標達成をサポートする。
- (5) 散会期 (Adjourning) : プロジェクトの目標が達成されることにより、メンバーの相互関係 (チームの関係) が終結する。

3 PBLによる実践

3. 1. 1 実践授業

本実践は、教科の指導法に関する科目であり、中学校・高等学校の教員免許状 (外国語) 取得のための必修科目である「中等英語科指導法 (授業論)」において行われた。本授業は、学部3年生が対象であるが、免許を取得している大学院生も毎年受講生全体の3分の1程度を占めた。また、本実践の目標を3つの領域において設定した (表3

表3 本実践の目標

認知的領域の目標	精神運動的領域の目標	情意的領域の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校の英語授業における課題を1つ以上発見することができる。 ・ 発見した課題に基づき効果的な教材を、パワーポイントを用いて製作することができる。 ・ 作成した教材を用いて、中学校の英語授業の進め方を、具体的に説明することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語学習指導案を、ワークシート等も含めて、実際に準備することができる。 ・ グループで協力して、実際の中学校検定英語教科書の単元に基づく模擬授業を実施することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループ・ワークにおいて、当事者及びファシリテーターとして積極的にコミュニケーションすることができる。 ・ 自分自身の学びをしっかりと振り返ることができる。 ・ 他者の人権を尊重し、主体的にディスカッションに参加できる。

参照)。

プロジェクトの「問い (ドライビング・クエスチョン)」は、「中学生が心を揺さぶられ、英語を好きになり、興味を持って英語の学習を続けてたくなる教材とは」であった。教材の条件は、(1) コンテンツに焦点をあて、(説明中心のものではなく) ストーリー性のあるもの、および (2) 中学生が思わず内容に引き込まれ、そこで使用している英語表現に気づけるようなものの2点であった。教材は「感動・メッセージ編」と「表現編」の2種類を作成した。それぞれ、パワーポイントを用いて10分程度とした。

3. 1. 2 実施期間と科目

2018年度の後期授業科目である「中等英語科指導法 (授業論)」(教科の指導法に関する科目、教員免許状取得のための必修科目、半期90分、週1コマ: 全15コマ) で行われた。対象学年は、学部3年生と大学院生であった。

3. 1. 3 履修学生

本実践における参加者は、教員養成系大学および大学院に学ぶ、学部3年生22名 (5チーム)、大学院生1-3年生20名 (5チーム) であった。専攻は学校教育学であるが、専門領域は英語、国語 (教科)、学校教育 (生徒指導等)、特別支援、心理学など様々であった。ランダムに、3名のチーム1つ (院生チーム)、4名のチームに6つ (学部生と院生各3チーム)、そして5名のチーム3つ (学部生2チームと院生1チーム) の合計10グループが結成された。学部と大学院の混合チームはなかった。学生たちには、作成された教材を全員で共有すること、および作成した教材や授業内で記述した振り返り等をデータとして分析し、学会や論文等で発表することもある旨を説明し同意を得た。

3. 1. 4 PBLのデザイン

- (1) 第1回目の授業で、イントロダクションとして、PBLの価値のインストラクション（実施する意義・意図の説明）、課題の設定および評価方法についての説明を行った。
- (2) 第2回目以降は、チームの結束性を高め、話し合いを効率的・効果的に行うためのファシリテーション技術（ホワイトボード・ミーティング[®]）を授業の冒頭（30分程度×3回）で練習した。特に、質問の技としての「オープン・クエスチョン」と「あいづち」を繰り返し練習し、人間関係構築と深い話し合いを目指した「発散-収束-活用」のプロセスに焦点を当てた。
- (3) 10週間（90分10コマ）に渡り、授業内外で企画を進めたが、まず、担当教員のアドバイスを受けながら「プロジェクト企画書」を完成させた。プロジェクト企画書の作成を通して、学生たちは自律的にプロジェクトの目的、課題の発見や情報収集の方法を学んでいった。また、パワーポイントを用いて教材作成を行うことにより、ICTの技術の習得も目指した。プロジェクト企画書の内容は、(1) プロジェクト名、(2) プロジェクトの最終ゴール、(3) 課題を解決するために調べること、(4) プロジェクトの価値、(5) 情報源、(6) 活動計画、および(7) 身につけたい力であった。
- (4) 第11回から第15回において、毎時間2チームずつ自分たちの企画を発表した。評価に関しては、指導者からICE（Ideas, Connections & Extensions）ルーブリック（表4参照）が提示され、各チームのプレゼンテーションを全員が評価した。ルーブリックのICEのどの段階かをチェックし、その理由を詳細に書いてもらった。また、各チームは、自分たちで独自のルーブリックを作成し、自己評価を行った。

表4 ICEルーブリック

要素（観点）	Ideas（考え）基礎知識	Connections（つながり）関連づけ	Extensions（応用）可能性
統合性	中学校の英語の授業上の課題を1つ以上発見することができる。	グループで設定した課題に基づいて、実際の中学校の英語授業をデザインし、教材を作成することができる。	グループで協力して、実際に作成した中学校の英語授業の教材を用いて、模擬授業を行うことができる。
姿勢	グループ活動には参加している。	グループ活動へは積極的に参加している。	グループ活動へは積極的に参加し、意見の合意を積極的に提案している。
教材	中学校の英語教科書の指導内容に沿った英語教材を作成している。	中学生にとってわくわくするような英語教材として統合している。	中学生がわくわくし、心が揺さぶられるような英語教材をデザインしている。
模擬授業	模擬授業は、分かりやすい説明になっている。	模擬授業は、聴衆のニーズが考慮されている。	模擬授業は、創造的な形で展開されている。
省察	毎回、授業やグループ活動での学びの軌跡を振り返って記述している。	毎回、授業やグループ活動での学びを、これまでの学習と関連づけて評価している。	毎回、授業やグループ活動での学びを、これまでの学習と関連づけ、意欲のレベルと今後の展望を予測しながら評価している。

- (5) 毎時間、詳細な振り返りを行うことにより、学習履歴をポートフォリオとして残した（表5参照）。上杉・市川（2005）が述べるように、自分の学びをコントロールしていくためには、自己評価力を高めていくことが重要である。つまり、毎時間、学生たちはプロジェクトを前進させるために様々な問題に直面し、その解決のために「内省」や「熟考」を行う必要がある。このようなプロセスを意識した自己評価（メタ認知的振り返り）を長年にわたり訓練していく必要がある（上杉・市川，2005，pp.127-128）。

表5 学習（チーム活動）の記録（振り返り）の質問項目

<p><事前確認></p> <p>本日の授業（チーム活動）における自分自身の目標、役割、課題（やるべきこと）等について記述して下さい。</p> <p><事後確認></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本日の学習（チーム活動）において、行ったこと、学んだこと、理解したこと等について記述して下さい。 2. 本日の学習（チーム活動）において、気づいたこと、感じたこと等について記述して下さい。 3. 次回までの課題（何をすべきか、どうすべきか）について記述して下さい。 4. 本日の自分自身の学習（チーム活動）への取り組みの動機の高さを10段階で評価すると、どのくらいであったかでしょうか（1が最も低い）。また、その理由はどのようなものであったでしょうか。動機の高さ：（ ） 5. 質問・疑問等があれば記述して下さい。

4 結果と考察

表6は、10チームが作成した教材のタイトルとその概要の一部である。各チームは、命の問題、多様性の問題、自然に関する問題、国際的な問題など様々な視点から課題を設定し、その課題解決を考え、英語で意見交換する機会を持てるような授業設計を行っていた。教材の内容に関しては、SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）を意識したものが多かった。また、英語を通して内容を理解し、その内容に関して感じたことや投げかけられた問いに対する自分の考えを英語で表現したくなるような教材を目指しているものが多かった。実際に作成した教材を使用して中学生に授業を行って見なければ分からないが、中学生が心を揺さぶられ、何かを主張したくなるような教材となっており、その意味では、プロジェクトの目標を達成できたのではないかと思う。

表6 作成された教材のタイトル（一部）

- ・英語で知ろう、命の大切さ（病気で命を失った子どもの話から、命の大切さについて考える）
- ・見つめ直そう水と生活－水の無駄遣いしていませんか？－（水問題からグローバルな視点を持つ）
- ・意識を変えよう！（英語で「多様性を認め合う大切さ」を学ぶ）
- ・You can do it!（浅田真央の失敗を乗り越える過程を、映像の簡単な英語から学ぶ）
- ・How do you express yourself?（自分と他の人との違いを認め、自分らしい自己表現について考える）
- ・援助を必要とする国の事情を英語を通して知り、世界に目を向ける
- ・Orizuru leads to success in the world.（折り鶴プロジェクトを通して国際協調の精神を知る）

右の2枚のパワーポイントのスライドは、「英語で知ろう、命の大切さ」のタイトルで、病気（癌）で命を失った子どもの話から、命の大切さについて考える教材の例である。挿絵は全て学生達自身で描いた。

学生の多くは、PBLによる主体的および自律的なプロジェクト遂行の経験が少なく、当初大変苦労していた。しかしながら、学習履歴によると、多くの学生の学習動機が徐々に上がっており、チームの結束と共に、メールやラインなども使用し、自らプロジェクトに関与し、貢献しようという態度が見られた。一方で、作業に対する時間配分や評価方法への学習不足など課題も残された。表7は、毎回振り返りとして記述してもらっていた、項目4「本日の自分自身の学習（チーム活動）への取り組みの動機の高さを10段階で評価すると、どのくらいであったかでしょうか（1が最も低い）。また、その理由はどのようなものであったでしょうか。動機の高さ：（ ）」において、その動機の高さ（10段階）のクラス全体の平均である。第1回目の7.9から第10回目の9.2へと上昇している。チームが徐々に成熟し、各チームメンバーの意欲および自主性・自律性が高まったと思われる。もちろん、グループによる差は見られた。

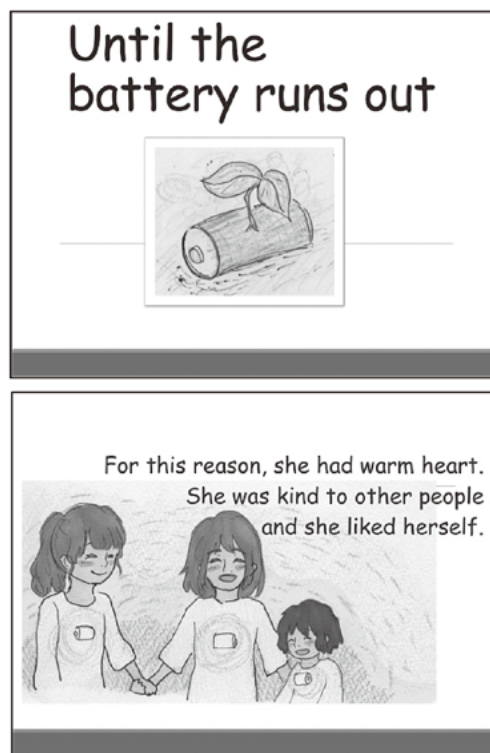


表7 プロジェクトに対する取組み（意欲：自主的・自律的）

第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回
7.9	7.7	8.8	8.2	8.6	8.6	8.8	8.5	8.8	9.2

また、図3は、ある学部学生の動機（主体的・自律的・協同的な活動）の変化である。プロジェクトが始まった第1回では、10段階で6とそれ程高くない。その後、順調に上がっていくが、第7回目ではまた下がってしまった。コメントには、「意見を言うことはできましたが、他のメンバーとの意見の違いを感じ、あまり意見が言えませんでした。他のメンバーの意見を認めつつできれば自分の意見も伝えていきたいです。」とあった。やはり、思うように意見を言うことが出来なかったことが評価を下げている要因と思われる。また、第9回目でも評価が下がっている。こ

ここでは、「文章を考えるためにチームに貢献できました。ただ、時制や冠詞などで迷うことがあったので、英語の理解を深めたいです。」とあるように、英語表現の問題で意欲が下がったようである。

このように、個人の動機は動的な (dynamic) ものであり、刻々と変化する。動機が徐々に上がったとは一概には言えない。動機は、他者との協同的な活動や自己の活動へのメタ認知によって変化していくものである。Tuckman のモデルのように、チームの状態にも影響を受けるかもしれない。個人がチームに影響を与えるのか、あるいはその逆なのか。今後、レフレクション (振り返り) 等を詳細に分析していきたい。

動機	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回
10	6	8	9	8	7	8	9	10	8	10
9			相づちをうつなど、積極的に話し合いに参加できたと思います。					スライドの知識について多くの意見を出すことができたと感じています。		
8		プロジェクトについて意見を述べ、方向性を決めるような言葉がけができたと思います。		感動編のスライドの流れとして、子供たちに同情という気持ちを持ってほしくないという思いを伝えることができました。具体的な音楽やスライドの順番への意見は思いつかばなかったもので、次回はずっとチームに貢献したいと思っています。具体的な意見を言っていきたいです。					文章を考えるためにチームに貢献できました。ただ、時制や冠詞などで迷うことがあったので、英語の理解を深めたいです。	
7					意見を言うことはできませんでしたが、他のメンバーとの意見の違いを感じ、あまり意見が言えませんでした。他のメンバーの意見を認めつつできれば自分の意見も伝えていきたいです。					
6	自分の意見を話すことはできませんでしたが、他者の意見に質問をして話を広げることができませんでした。									
5										
4										
3										
2										
1										

図3 ある学部学生の動機 (主体的・自律的) の変化

表8は、一部ではあるが、学生の本プロジェクト全体に関する振り返りから抜粋したものである。授業外でもこのプロジェクトを遂行したり、リフレクションを大切に、自分の学びの過程を確認している学生の姿を垣間見ることができた。また、協同でプロジェクトを遂行していくことのメリットを挙げている学生も多かった。例えば、最初のレフレクション (振り返り) にもあるように、チーム内の人間関係が良いと、活動への満足感が高くなるようである。更に、レフレクション (振り返り) によって、毎回の活動をメタ認知することは自分の学びに責任を持つことにもつながるようである。アイデアの創発やお互いの尊重もプロジェクトを通して得られた。

表8 学生の振り返り (一部)

- ・授業外で準備を進め、授業内で確認修正を行う。授業外でもアイデアや進捗を共有し合い、いつでも相談できたため、活動しやすいグループだった。
- ・リフレクションを大切にできた。学びを記録するのは後から見直すことができるのでメリット大。
- ・自分だけでは思いつかないアイデアや技術を知ることができてよかった。
- ・協力的にお互いを尊重し合いながら行うことができた。みんなで一生懸命に取り組んだ。

さらに、本実践では、チームの話し合いが効率的・効果的になるようにファシリテーションの一技術である、ホワイトボード・ミーティング®をワークショップ形式で導入した。このことに関して、最終レポートに記述されたコメントを表9に示した (原文通り)。

振り返りから明らかのように、学生たちはファシリテーション技術としてのホワイトボード・ミーティング®の有効性を実感したようである。特に、深い対話を可能にする質問の技である「オープン・クエスチョン」と「あいづち」は効果的であった。このような対話によってチーム内に信頼関係が形成され、プロジェクトに対して取り組みやすい環境が生まれ、充実した学習活動になったようである。お互いを尊重し、主体的そして協同的に活動を進めていくためには、ファシリテーションの技術が大いに役立つと思われる。人間関係の質を高めることが最終的には成果物の質を高めることにつながったことは、Kim (2001) のモデルと合致した。

表9 ファシリテーションとしてのホワイトボード・ミーティング®に対する振り返り（最終レポート，原文通り）

- ・チームでの活動の前に毎回ホワイトボード・ミーティング®を行うことで、一人一人のことを知ったり、話す雰囲気ができたりすることでチームでの活動に入りやすくなるを感じた。これから、児童生徒同士の活動の充実のために実践していきたい。（学部生）
- ・意見がなかなかでなくなった時に、うまく言葉がけをして考えを出し合うことができなかつたことが挙げられます。最初の方の授業で先生が説明されていた、「オープンクエスチョン」をうまく使って話し合いを進めればよかったなと思いました。（学部生）
- ・初回では、オープンクエスチョンを意識したアイスブレイキングから自己紹介を行った。グループのメンバーの情報や理想の教師像を語り合ったことで、信頼関係が形成しつつ、学習活動の回数が増えるごとに学習活動がより盛んになっていく過程を実感することができた。また、9つのオープンクエスチョンと8つのあいづちから良好なコミュニケーションの基礎を学んだ。（大学院生）
- ・グループ活動を取り入れるならば、まずはグループのメンバー同士が意見を言い合えるような雰囲気づくりが必要で、そのためにはこの授業の初めの方で行った様々な自己紹介や、オープンクエスチョンの練習なども有効だったと思う。（大学院生）
- ・協同学習を円滑に行うための手段として「ファシリテーション」が使われ、そのお陰でチームの取り組みがやり易くなっていったと思う。これは中学校・高校の英語授業でも同様に、あるいはその一部でも採り入れることの出来るものだと思う。それは前時代的な英語指導の在り方から脱却して、新しい英語指導の在り方（例えば英語コミュニケーションを重視するような）に道筋を示すものだと思う。（大学院生）

6 おわりに

本実践では、プロジェクト学習（project-based learning：PBL）を通して、中学校の英語授業のデザイン方法と基本的な授業方法を学習することを目的とした。具体的には、英語授業の構想・設計・実施・評価および教材作成に関わる一連の作業を、チームで学びあい、助け合いながら行った。そのため、現在の日本の英語授業における現状と課題をグループ（チーム）のプロジェクトとして調査し、その解決を目指した教材作成とその教材に基づく20-30分程度の模擬授業を設計・実施することによって、英語指導に必要とされる能力を身につけることであった。

本実践では、学生の多くは、PBLによる学習の経験がなく、当初大変苦労していた。しかしながら、学習履歴によると、多くの学生の学習動機が徐々に上がり、チームの結束と共に、メールやラインなども使用していた。主体的・自律的・協同的にプロジェクトに関与し、貢献しようという態度が見られた。今後は、振り返りの詳細な分析を基に、学生のPBLによる変容を考察していく必要があるだろう。また、チームの発達についても分析していくことは意味があるだろう。

注

- 1) 本稿は、2019年3月23日に京都大学で開催された第25回大学教育研究フォーラムと2019年6月23日に北陸大学で開催された中部地区英語教育学会第39回大会における口頭発表に加筆修正を行ったものである。
- 2) 筆者は、特定非営利活動団体法人日本PBL研究所主催の「PBLアドバイザー養成講座」の全課程を修了し、認定試験を経て「PBL認定アドバイザー」として認定された（2019年6月）。

引用・参考文献

- 秋田喜代美・福井大学教育学部附属義務教育学校研究会（2018）.『福井発 プロジェクト型学習 未来を創る子どもたち』東京：東京館出版社
- 稲葉竹俊・奥 正廣・工藤昌宏・鈴木万希枝・村上康二郎（2017）.『プロジェクト学習で始めるアクティブラーニング入門－テーマ決定からプレゼンテーションまで－』東京：コロナ社
- 上杉賢士（2010）.『プロジェクト・ベース学習の実践ガイド－「総合的な学習」を支援する教師スキル－』東京：明治図書
- 上杉賢士・市川洋子（2005）.『プロジェクト・ベース学習で育つ子どもたち－日米18人の学びの履歴－』東京：学事出版
- 栗田佳代子・日本教育研究イノベーションセンター（2017）.『インタラクティブ・ティーチング－アクティブ・ラーニングを促す授業づくり－』東京：河合出版
- 鈴木克明・美馬のゆり編著（2018）.『学習設計マニュアル』北大路書房

- 鈴木敏恵 (2012). 『課題解決力と論理的思考力が身につくプロジェクト学習の基本と手法』 東京：教育出版
- 田中智志・橋本美保 (2012). 『プロジェクト活動－知と生を結び学ぶ』 東京：東京大学出版会
- 中島英博 (2016). 『授業設計』 東京：玉川大学出版部
- 日本PBL研究所 (2018). 「PBLアドバイザー養成講座資料 (2018年度)」 NPO日本PBL研究所
- 馬上美知 (2017). 「エドヴィジョン型PBLにおける情報機器及び情報活用能力の育成－ミネソタ・ニュー・カントリースクールの評価ループリックに着目して－」 『川村学園女子大学研究紀要』 28(2), 97-110.
- 松田剛典・佐伯 勇・木村亮介 (2019). 『大学生のためのキャリアデザイン はじめての課題解決型プロジェクト』 京都：ミネルヴァ書房
- 溝上慎一・成田秀夫 (2016). 『アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習』 東京：東信堂
- 美馬のゆり編著 (2018). 『未来を創る「プロジェクト学習」のデザイン』 東京：近代科学社
- 美馬のゆり (2017). 「プロジェクト学習による三方よしの社会的価値の共創」 『サービソロジー』 14, 4(2), 10-15.
- 美馬のゆり (2018). 「これからの学びを想像する」 鈴木克明・美馬のゆり編著 『学習設計マニュアル』 (pp.170-181), 北大路書房
- Bell, S. (2010). Project-based learning for the 21st century: Skills for the future. *The Clearing House*, 83, 39-43.
- Kim, D. H. (2001). Organizing for learning: Strategies for knowledge creation and enduring change. Waltham, MA: Pegasus Communications, Inc.
- Larmer, J. & Mergendoller, J. R. (2010). Seven essentials for Project-Based Learning. *Giving Students Meaningful Work*, 68 (1), 34-37.
- Roessingh, H., & Chambers, W. (2011). Project-based learning and pedagogy in teacher preparation: Staking out the theoretical mid-ground. *International Journal of Teaching and Learning in Higher Education*, 23, 60-71.
- Thomas, J. W. (2000). A review of research on project-based learning. https://tecfa.unige.ch/proj/eteach-net/Thomas_researchreview_PBL.pdf
- Tuckman, B. W. (1965). Developmental sequence in small groups. *Psychological Bulletin*, 63, 384-399.
- Tuckman, B. W., & Jensen, M. A. C. (1977). Stages of small-group development revisited. *Group & Organization Studies*, 2, 419-427.

A Practical Report on Project-Based Learning in the English Teacher Training Course

Hiromasa OHBA*

ABSTRACT

The purpose of this practical report was to investigate how students (both undergraduate and postgraduate) on a teacher training course at university could become independent, autonomous, and cooperative learners through “Project-based learning (PBL)”. To be specific, the study focused on the course subject “Teaching English as a Foreign Language at Secondary School (Lesson Study)”, which encompassed English teaching methodology. Under the theme of “Junior high school students are moved and interested in English”, the students were challenged to develop teaching materials, and to present and evaluate them using their own rubrics. The aim was to foster their qualifications and abilities as future teachers. The students explored the issues of English education at junior high school, and developed teaching materials that made full use of ICT. In order to examine how students changed through the process of exploring English and English education on this course, the students’ reflections, questionnaire answers, and learning motivation logs were analyzed.